運筆麁画　下

46

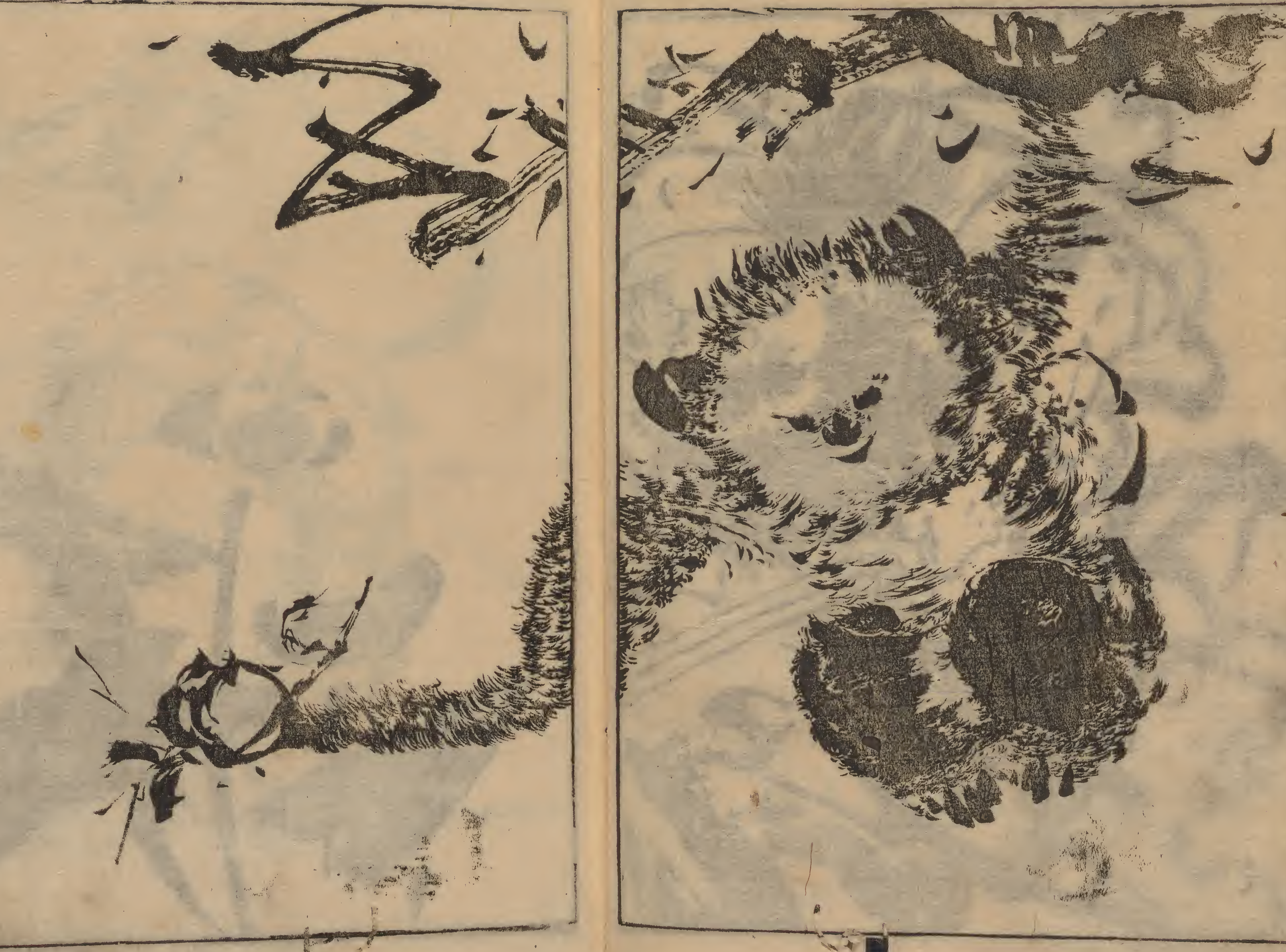
運筆麁畫巻之下目録

接小雀の児　栗り栗鼠　鐘馗剱を研
猿子を背に　かり田孫　布袋川にわたる
一筆かき馬　糸牛　柳にうぐひす
娘ごう　早ころび　娘く詠く妻
毛佐論　津ゑ　柿小かしら
葦にかもせみ　糸かき　僧
蒿中詰かゝす　丹頂　蓮
猫の児　桃り山鷄　赤人

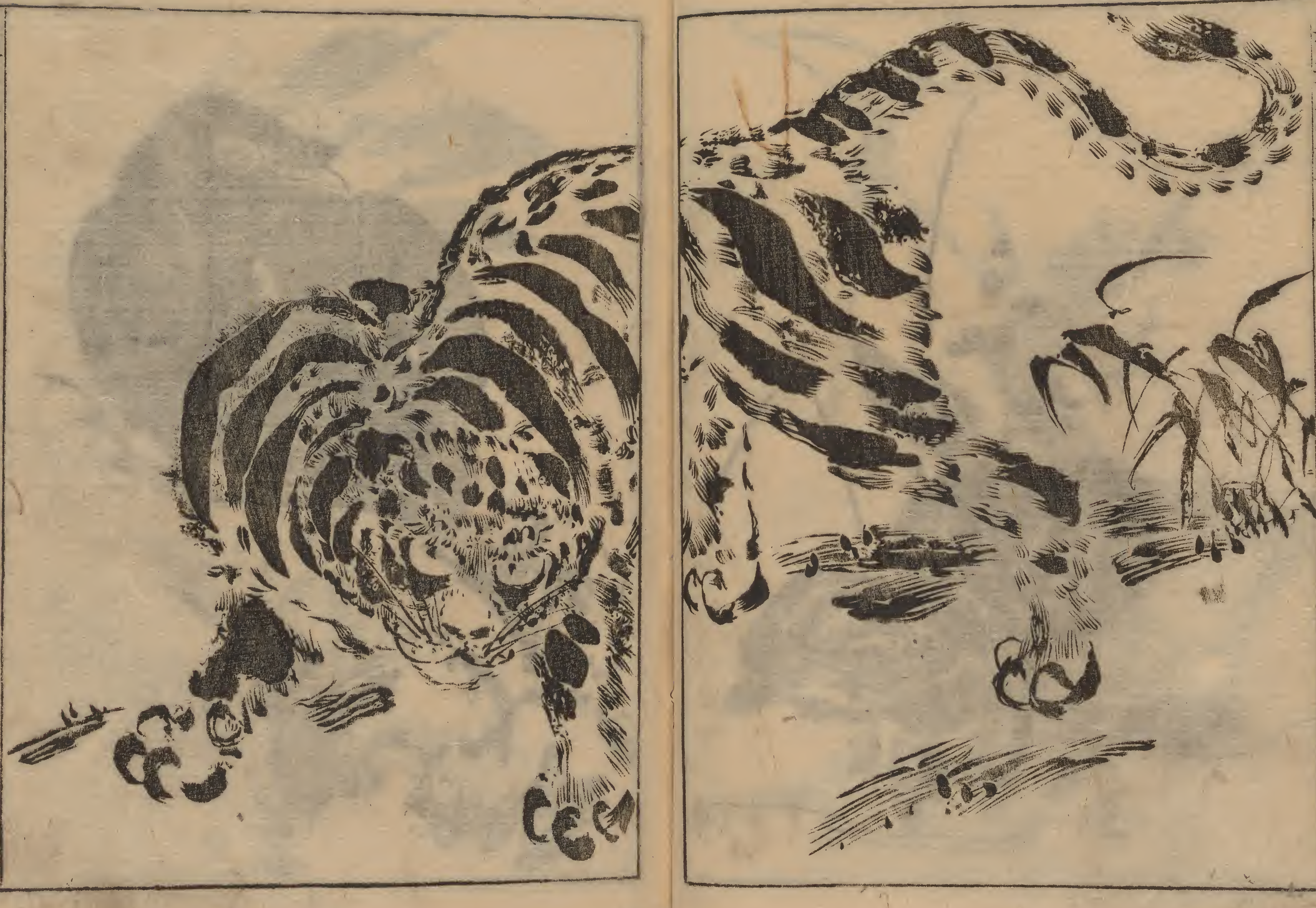
雀雛（じやくすう／すゞめのこ）

鍾馗研釼

猿愛子。



遊筆漫畫 下



猫兒 ねこのこ

漢筆麁画

祖元ハ倉卒に画くことを要とはこゝろ貴乃人能学ぶり
於ても画く時ハ唯骨法敏かんことを欲すを故に祖
書すへし筆を曲ぐりをせずと雖其自ら書画の
運筆中露滴なとハ行曲ぐりとするものあれ共躊躇して
拂ひしもハ筆意能運乃ち出足して可也又草画ハ
曲ぐりしもあるよりとする故楷法の紙を用ゆ祖元にも
曲ぐりをせざる故素白紙を好む次紙ハ毛道紙あるひ
ハ大高奉書乃類宜し楷法をせざる紙をもちゆる
墨を点じ下は筋能滲り分自然乃風韻を現はし
草筆にハ其脉を用ゆるものあり是を付立といふ

運筆麁画叙論

書に真行草の三体あり画も亦然り楷中草書
草ときもの物象れ質を写し出して細かに鑿
せざるもの八却て微妙の精神を現す故に古人も草
画を貴ぶ草に真行生あり画を学ぶものは
草画の骨法を錬磨せん事を要とす草画ハ
骨法熟さぬ時八真行自然容易し所謂真画ハ
濃墨をもちひ物状を画き淡墨を施して其
形を曲どる又草画ハ淡墨にて画き濃墨を点
じ筆勢れ妙跟を現せし勢浪を裏にて地渓を

妙に掃ひ去る其射氣を深くして古今草画
に名誉ある者多くは牧谿の風骨を学ぶ牧
谿は草画を龍蛇を捕へ獰猛を携ふ大筆あ
りて企て及ぶ所にあらず古今等一と云説なり
或人のいはく予若干要於画書を撰述して世に
行ふと雖も皆末々細微を写し無色を彫の点
画のことのみにいはざる草画は画書を欲す草画
蓋し難しといへども画道初入の輩に草画の粉本
試みに一二を学ばしむる物より真画を学ばしむる事
を学ばずして此挙は物学の深とせざる事

が日此挙を思はげるに非ざれ及草画は彫刻に容易
からざるなり荏苒として年を経るが所家に兼書乃
骨法あり濃墨にて兼ねと画き淡墨を施し写
神采のつき以て補ふ故も其兼書の中に於て
運筆の遅速利鈍を論じ守子は叙論せず其
故に此画書は画図の本来ぶに事義の不備の
活機は多人の習熟にあり今先所の平日書捨ら
悉く粉本遺稿を集め一生風骨を撰写し
出し積で六十有五種に至る首書に運筆の
次行の象を画に其法は先所集を毎に識筆の

宴を設け諸門人を会して各一枚を画し與へ迎
遂に競儀を呈し其工拙を評して益請つ生を
ちげるに先筆勢草にして右に円を書又廻り又堅に
し横に出或ハ低昂或ハ伸縮横斜曲直多端の
墨妙を集録に精緻骨法也全かれを悉く出し一帝
画に遂筆無画れ数名に遠従せしむといふ

後素軒橘守國書

948
Morikuni unpitsu sogua ¥6.40

貝原先生述

堪忍記

半紙本 全部四冊

古歌に
かんにんのなるかんにんはかんにんを
かんにんならぬ
かんにんするかかんにん

此書は往昔孔子子張といへる弟子に忍の字を示めし給ふより堪忍の二字は心をとをたて国をたもち家をも治め身をおさむる妙薬なれバ此書にハ児女子までも見やすくかなかしやんがなにひらがなをまじへ絵をくハへ和漢の人のかんにんとしたる事にて忠孝最高名にあるかみまでの二字になる事ども書あつめ何の家にも此堪忍をまもり又このたしなみの種ともなさばよからんの
外に書物品々此書林まで御求め可被下候

書林 大阪心斎橋筋安堂寺町
秋田屋太右衛門板